

# 早生大粒大豆「シュウリュウ」の 品種特性と栽培のポイント

(平成27年から山形県の奨励品種(優良品種)に採用)



左: シュウリュウ, 右: リュウホウ

## 品種特性 ~粒が大きく、品質が良い~

- ①成熟期: 「リュウホウ」並みの**「早生」**
- ②百粒重: 「リュウホウ」並みの**「大粒」**
- ③子実重: 「リュウホウ」より**多収**(「リュウホウ」に比べ8%多収)
- ④子実品質: 「リュウホウ」より**しわ粒が少なく**外観品質に優れる
- ⑤病害抵抗性: **SMV抵抗性が「極強」**で、褐斑粒の発生はほとんどみられない  
ただし、「シュウリュウ」はダイズシストセンチュウ(SCN)に弱い。



左: シュウリュウ, 右: リュウホウ

- ⑥機械適応性: 最下着莢位置、倒伏抵抗性は「リュウホウ」より良好であり、**機械収穫に適する**
- ⑦加工適性: 粗タンパク含有率が「リュウホウ」より高く、**豆腐加工適性が高い**

品種名	開花期 (月日)	成熟期 (月日)	倒伏程度 (0-4)	主莖長 (cm)	最下着莢位置 (cm)	主莖節数 (cm)	分枝数 (本/本)	子実重 (kg/a)	百粒重 (g)	粗タンパク含有率 (%)	等級 (1-10)
シュウリュウ	7/28	10/4	0.5	54.4	11.4	14.9	4.3	32.6	30.3	43.2	3.8
リュウホウ	7/27	10/3	0.6	55.3	10.9	14.0	4.7	30.2	29.8	41.7	6.0

(農業総合研究センター・水田農業試験場: H20~25、現地5カ所: H22~25)

注) 等級1 (1上) ~9 (3下)

平成29年3月

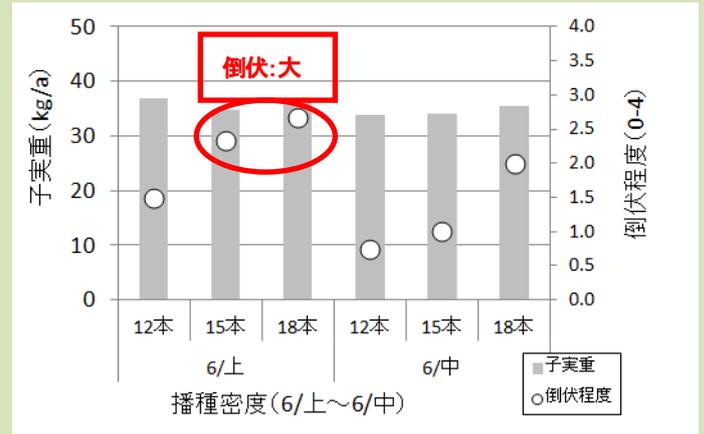
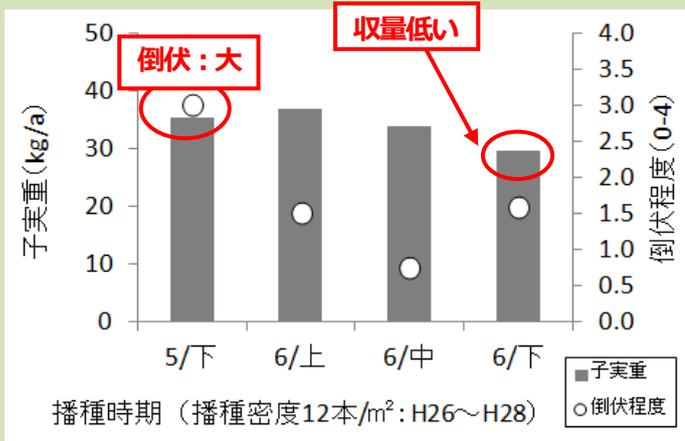
山形県農業総合研究センター

# シュウリュウの栽培ポイント

## 1. 播種期・栽植密度

- 播種時期：6月1日から6月20日まで。
- 播種量：4～6kg/10aとなる。  
(大粒のため、播種量に注意)
- 栽植密度：6月1日から10日まで12本/m<sup>2</sup>、  
6月20日までは12～18本/m<sup>2</sup>を目標とする。

必要種子量(栽植密度別)  
12本/m<sup>2</sup>(発芽率90%)で4kg  
18本/m<sup>2</sup>(発芽率90%)で6kg



播種作業が遅れると・・・  
→生育量不足から減収。成熟期に青立ち株が増加する。

## 2. 雑草防除

- 基本防除：播種直後の除草剤散布と2回の中耕培土。
- 残草処理：非選択性除草剤の畦間用専用ノズル処理(リニロン水和剤やゲルシネート液剤など)や選択性除草剤の全面散布処理(トキジム乳剤やバンタゾン液剤)などによる対応を行う。  
なお、**バンタゾン液剤**を全面散布処理した場合に**薬害**が発生し、一時的な葉の褐変症状が見られるが、収量への影響は小さい。

### ● 除草効果 (バンタゾン液剤を使用した場合)

- ・一年生広葉雑草のうち、「イネタデ」、「イチビ」、「スベリヒユ」に対する効果が高い。
- ・イネ科雑草に対する効果は低い。

除草試験 (H26~H28) (無除草区: 上段\_本数、下段\_m<sup>2</sup>当り乾物重(g)、バンタゾン: 無除草区%)

	一年生広葉雑草						
	ホアカイトウ	イチビ	イタデ	イノコサ	ツクサ	スベリヒユ	計
無除草区	127	3	11	78	22	80	320
	103	1	1	2	1	9	117
バンタゾン 150ml/10a	17	0	0	68	206	0	37
	10	0	0	290	123	0	16

### ● バンタゾン液剤による薬害症状



3葉期処理5日後



3葉期処理15日後

処理時期ごとのバンタゾン液剤の影響(H26~28)

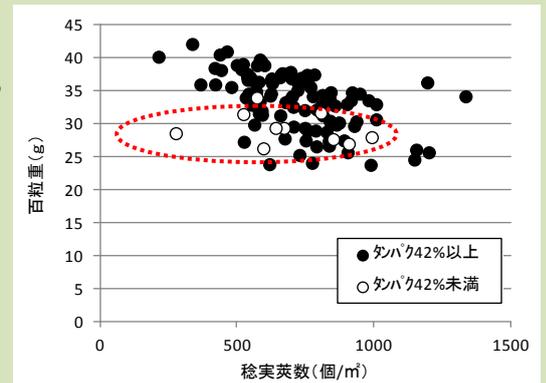
処理時期	主茎長 (cm)	節数 (本/株)	分枝数 (本/株)	莢数 (莢/m <sup>2</sup> )	全重 (kg/a)	子実重 (kg/a)	対無処理 (%)	百粒重 (g)
3葉期	62.8	16.8	3.7	563	61.4	31.8	97	38.1
6葉期	67.2	17.1	3.7	535	61.7	31.7	97	39.0
開花期前	68.5	17.1	3.1	546	65.2	32.6	99	39.6
無処理	67.9	17.2	3.6	566	64.5	32.8	100	39.1

※バンタゾン液剤150ml/10a(希釈水量100l)を各処理時期に散布したデータ

処理15日後には下位葉に薬斑が見られるが、上位葉に進展は見られない

### 3. 干ばつ対策

ほ場の過乾燥時は、畦間灌水などを実施する。  
特に、開花期以降にほ場乾燥が続くと、  
着莢数の減少、百粒重の低下により減収し、  
青立ちが発生しやすくなる。  
また、粗タンパク含有率も低くなる。



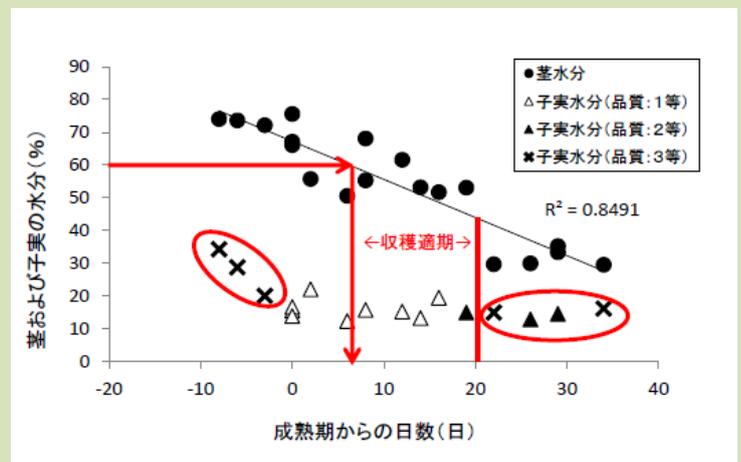
### 4. 病害虫防除

- 紫斑病：種子消毒の励行と開花期 25 日後～35 日後の薬剤散布
- マメシクイガ：8月25日頃（1回目）と9月5日頃（2回目）の薬剤散布。特に大粒品種のため、被害の影響が大きい。
- ダイズシストセンチュウ：  
抵抗性が「弱」なので、3年以上の連作を避ける。また、被害が発生している圃場への作付けは行わない。



### 5. 刈取り適期

子実水分 20%以下、茎水分 60%以下から（おおよそ成熟期 6 日後以降）。  
裂莢などにより品質や収量が低下するため、**成熟期後 20 日頃**まで収穫する。



### 基本技術の徹底

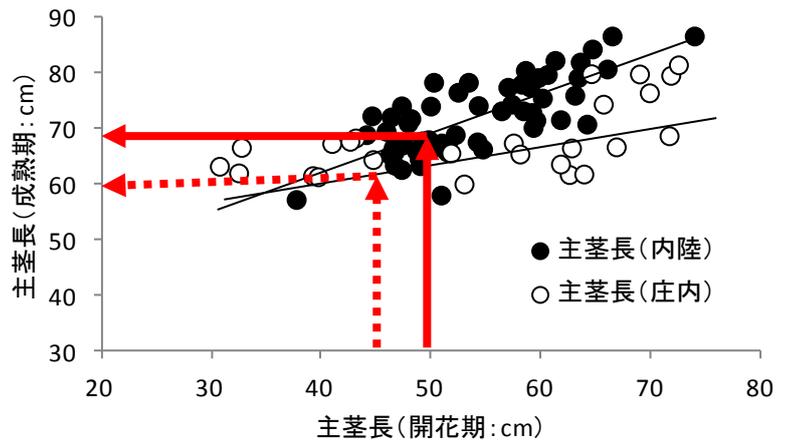
- **排水対策**：団地化する、本暗渠の水こうを開ける、補助暗渠・明渠の施工を行う  
播種時の湿害軽減のため、小畝立て播種を行う
- **土づくり**：土壌分析を行い、ようりん・苦土石灰等を施用し、pHを6～6.5に調整する  
地力維持のため、堆きゅう肥などの有機物を施用する
- **施肥**：基肥：窒素 2～3kg/10a、リン酸 6～8kg/10a、カリ 10～12kg/10a  
※根粒菌の活性を促すため、窒素肥料はできるだけ施用量を抑える
- **種子消毒**：紫斑病対策、黒根腐病、莖疫病などの土壌病害、初期害虫、ハト対策として、効果の高い剤による種子消毒を必ず実施する
- **中耕培土**：1回目：3葉期（子葉節まで培土）、2回目：6～7葉期（初生葉節～第1葉まで培土）、ただし、開花1週間前まで終了する

# 300kg/10a の収量を確保する生育の目安

## ①開花期の主茎長

- ・内陸：50cm
- ・庄内：45cm

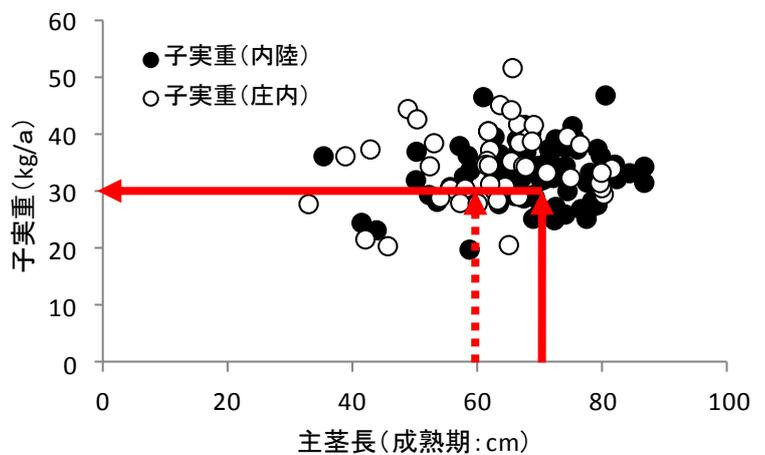
適期播種を行い生育量を確保する。  
 土壌乾燥時には灌水を行い、開花以降の落花・落莢を防止する。



## ②成熟期の主茎長

- ・内陸：70cm
- ・庄内：60cm

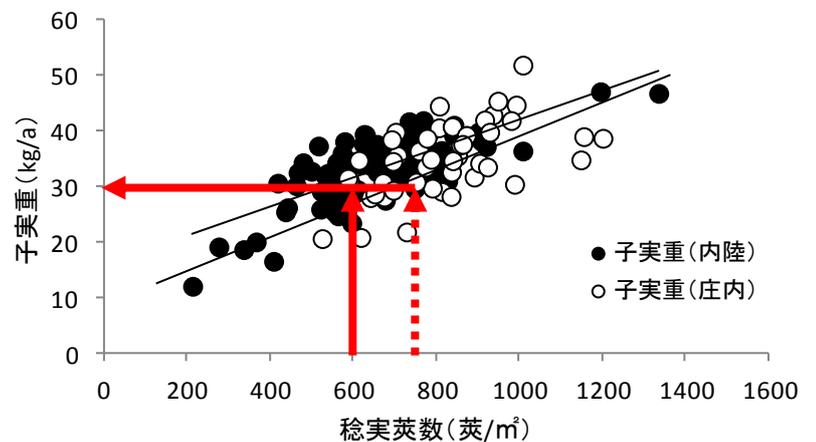
この時、倒伏程度は内陸で「3」以内、庄内で「2」以内となる。



## ③成熟期の稔実莢数

- ・内陸：600 莢/m<sup>2</sup>
- ・庄内：750 莢/m<sup>2</sup>

この時、百粒重(内陸)は35g程度、百粒重(庄内)は30g程度となる。



## ●300kg/10a 時の生育の目安(開花期)

	内陸地域	庄内地域
開花期	7/28日8/5	7/26日8/4
主茎長	50cm	45cm
主茎節数	12~14節	12~14節
分枝数	2.0~3.0本/本	2.5~3.5本/本

## ●300kg/10a 時の成熟期の目安

	内陸地域	庄内地域
成熟期	10/5日10/17	9/26日10/13
主茎長	70cm	60cm
最下着莢高	15cm	13cm
主茎節数	16~18節	16~18節
分枝数	4.0~5.5本/本	5.0~6.0本/本
m <sup>2</sup> 当たり莢数	600莢	750莢
収量	300kg/10a	300kg/10a
百粒重	35g	30g